



第41回 日産 童話と絵本のグランプリ

君のいる場所

安井 史子

わたしはトラネコのミーコ。ニンゲンのお父さん、お母さん、小学生のゆう君とこの家に住んでいる。

「ミーコ、ちよつとどいて」

日曜日、いつものように出窓にすわって外の小鳥を見ていたら、お父さんが水そうを持ってやってきた。中には白い砂がしいてあって、木の枝や植木鉢のかげらがおいてある。

ゆう君が水そうのふたを開けて、巻き貝を一つ、そつと砂の上においた。

「これはね、オカヤドカリのパールだよ」少しすると、貝がらの下からもぞもぞ紫色の足が出てきた。あ、紫色だからパールって名前なのね。黒いつぶらな目をしたパールは、さつさと植木鉢の下に入ってしまった。

あの日から、ゆう君はパールのお世話で忙しくなった。エサや水を取りかえたり、きりふきで砂をしめらせたり。わたしとはちつとも遊んでくれない。

たしかにパールがちよこちよこ歩いている姿は面白い。わたしもついきわりたくなる。でも、そんなとき、ゆ

う君はわたしをさつとだきあげて床に下ろす。

「ミーコ、いたずらしちゃダメだよ」って。水そうごしにちよつと前足をだしただけなのに。パールがくるずつと前から、出窓はわたしのお気に入り場所だったのに。

ある晩、だれもないはずのリビングからカサコソ音がした。耳をすまます。出窓のカーテンの上のほうだ。何かいる。そつと出窓にとびのつて、カーテンに前足をかけたたん、目の前に何が落ちてきた。カチャーン！

カーテンのすきまから満月の光がさしこんで、パールが転がっているのが見えた。

「ひどいじゃないか！」

パールが小さなハサミをふりあげておこつている。

「パ、パール？ ご、ごめん」

「ぼくが水そうから出てきたんでびつくりしたんだろ。そんな朝飯前さ」水そうのふたがずれてすきまがある。

「いったいどこへ行くつもりなの？」

「海だよ。南の海」

「ええっ」

「ぼくは南のあたたかい海で生まれたんだ。見たすかぎり続く砂浜があつてさ、仲間がたくさんいるんだよ。海のそばには林もある。ぼくたち、木登りもうまいんだぜ」

パールはうきうきと話し続ける。

この前、ゆう君が見ていたガイドブックに、エメラルドグリーンの海の写真があつた。ゆう君たちは夏休みに南の海に行くのだ。パールのふるさとつてあんなところかな。

でも、パールには言えなかった。ニンゲンたちが飛行機で行くところに、こんなちよつぽけなオカヤドカリが行けるはずないもの。

気がつけば東の空が明るくなりかけていた。

「パール、もうそろそろ水そうにもどつたほうがいいんじゃない？ 君がふたを持ち上げられることがわかつたら、きつと上に重石をのせられちゃうよ」なるほど。ミーコは頭がいいなあ。

今日のところは帰るとするか。サンキュパールは水そうをのぼつて帰つていった。

あれからときどき、ニンゲンたちが留守のときに、パールと遊ぶようになった。

ソファの上の、いちばん寝心地のよいクッションを教えてあげた。パールはクッションより、ガジュマルの鉢植えを気に入って、枝の上ですやすや眠つてしまった。

食器棚をのぼつたときは、足をきたえるんだつて、すぐくはりきつていた。南の海に行くのをまだあきらめていないらしい。このほうが楽しいって思えるときが来るといいな。

パールが出窓のカーテンをのぼつた、あの満月の夜から一カ月が過ぎた。出窓でお月見をしていたとき、パールが聞いてきた。この家に来る前はどこにいたのか、そこへもどりたいか、つて。

わたしは赤ちゃんだったとき、道ばたの箱の中でブルブルふるえていた。

寒くてお腹がすいて。わたしは絶対にもどりたいなかつた。ここにはおいしいご飯もあつたかいベッドもある。それに家族がいるもの。

「家族？ ニンゲンたちが？」

「そうよ。パールとみたいには話せないけど、だいたいわかる。気持ちに通じるの」

「ふうん」

パールはそれつきりだまつてしまった。

次の日、パールがいなくなった。

「あつ、水そうのふたが開いている」ゆう君があわてている。お母さん、お父さん、みんなでパールをさがす。わたしには心あたりがあつた。家のなかでただ一か所案内しなかつたところ、それはお風呂場。排水口のあみをはずしてパールが外に出してしまうといけないから。

お風呂場へ走つていくと、まさに今、パールが排水口へ入ろうとしていた。「パール！ 行っちゃだめ」

パールがふりむく。「ミーコ、行かせてくれ」

「南の海はものすごく遠いのよ。たどりつく前にパープル、きつと死んじゃうわ」

わたしはパープルをパケットとくわえた。とつぎにパープルがハサミで鼻をささんできた。

「ギャオオー！」

わたしはブンブン首をふった。家族みんなが走ってくる。

「ミーコ、どうした！ あつ、パープル！」

パープルは水そうにもどされ、ふたには重石がおかれた。お母さんが、わたしの鼻にばんそうこうをはつけてくれる。「どうしてお風呂場なんかにいたのかしら」

「水の匂いがしたのかな」

お母さんとお父さんの話を聞いて、ゆう君がポツリと言った。

「海に帰りがかったのかもしいないね」

その日から、パープルはあまり動かなくなつた。話しかけても返事はない。ついに、ごそごそと砂にもぐつてしまった。わたしのことを怒っているんだらうか。

何日も砂から出てこないパープル。ゆう君も心配して、しよつちゆうのぞきに来る。

もう二度とここから出られないと思つて絶望しちゃつたのかしら。それとも、ひどいケガをしているのかもしいない。わたし、思いつきりふりまわしてしまつたから……。

「ああつ」

ゆう君が大きな声を出した。水そうに前足をかけてのぞきこむと、砂の中に、バラバラになつたパープルのハサミと足が見えた。

わたしは胸が苦しくなつて、ソファの下で泣いた。こんなことになるなら、止めなければよかつた。南の海に帰りがたてたまらなかつたパープル。かわいそうなパープル。

「ママ、パパ、ミーコ！ みんな来て！」

ゆう君の声がかわつた。みんなが見守る水そうの砂の中で何かがごそごそ動いた。

「パープルは脱皮したんだ。しばらくそつとしておかなかちや」

お父さんが言った。バラバラのハサミ

した。

ゆう君たちの旅行の間、わたしをあずかってくれるおばあちゃんがむかえにきた。

「じゃあ、ぼくもスタンバイするよ」

パープルがゆう君のリュックのメッシュポケットにもぐりこむ。

「じゃあね、パープル、元気でね！」

「じゃあね、ミーコ、グッドラック！」

メッシュのすき間からのぞくパープルの黒い目はキラキラ、キラキラ輝いていた。

と足は、パープルが脱いだ古いカラだつたんだ。

パープルは砂の中で、脱皮したてのやわらかい体がたくなるのをじつと待つていた。その間、わたしは考えていた。

生きてたどりつけるかわからなくても、どうしても帰りたい場所、そこがパープルが本当にいるべき場所なんだ。パープルが行つてしまつたら、もう二度と会えないだろう。そう思うと胸がキューツとちぢんで苦しくなつた。わたしは急いで、南の海で仲間たちと遊んでいるパープルの姿を思い浮かべた。ちぢんだ胸がひろがつて、気持ちぐラクになつていく。

「ミーコ、鼻の傷はなおつた？ ごめんよ」

パープルが砂からはい出してきた。

わたしはゆう君一家の旅行の計画を話した。パープルの黒い目が、みるみるかがやきます。

「どうしたらぼくも行けるかな？」

わたしは作戦を練つた。パープルは出発の日の朝、ゆう君のリュック

審査員コメント

構成が見事です。最も意外性があるのは、パープルが砂にもぐつてしまい、バラバラの脚とハサミが見える場面。とてもスリリングで、読者の共感性を高めます。ヤドカリの居たい場所へ送り出すのを応援したくなり、無事に着いてほしいと思わせます。

吉橋 通夫

安井 史子

主婦 愛知県

受賞のことば

素晴らしい賞をいただきありがとうございます。胸がいっぱいになったり、心に響くできごとがあるたびに(物語に変えて自分の外へ出したい)と思います。書きたいことはたくさんあるのに、私がぐずぐずしているの、あまりに時が経つのが早く！ この賞を励みに、もう少しスピードアップするか長生きするかして、お話を書き続けたいです。

受賞歴 第34回 日産 童話と絵本のグランプリ 佳作
第37回 日産 童話と絵本のグランプリ 佳作



ついにその日(ひ)がきた。
わたしが水(すい)そうのふた(ふた)の重石(おもし)をずらすと、パープル(パープル)が出てきて、ハサミ(ハサミ)でわたしの鼻(はな)をなでた。
「もう痛(いた)くない？」
「うん、ぜんぜん」
「ぼく、ミーコ(ミーコ)のこと忘(わす)れないよ」
「わたしも」
胸(むね)がキューツ(キューツ)としてきたから急(いそ)いで言った。
「わたし、満月(まんげつ)の夜(よる)はここでお月見(つきみ)することにする。パープル(パープル)も南(みなみ)の海(うみ)で、仲間(なかま)のみんなとお月見(つきみ)してね、きつとよ」
「うん、約束(やくそく)する」
わたしは前足(まえあし)とハサミ(ハサミ)で指(ゆび)きり